

平成24年構造改訂版 SR[ラーメン構造]編の概要

記載ページ等		記載概要		改訂理由等	
第2版	平成24年構造改訂版 SR編	第2版	平成24年構造改訂版 SR編		
全般	全般	-	投影定着長さが規定された。 (例：柱せいの3/4以上等) 直線定着とフック付き定着（例：直線定着長さL2、フック付きの定着長さをL2h）が明確に区別され、コンクリート強度による区分・鉄筋の種別による区分が変更された	「公共建築工事標準仕様書（建築工事編） 国土交通省大臣官房官庁営繕部（平成22年版）」、「建築工事標準仕様書 JASS5 鉄筋コンクリート工事 日本建築学会（2009年2月）」、「鉄筋コンクリート造配筋指針・同解説 日本建築学会（2010年11月）」との整合	
SR-000	本文	本文	鉄筋区分 ・ SD295A, SD295B, SD345 ・ SD390	鉄筋区分 ・ SD295A, SD295B ・ SD345 ・ SD390	JASS5等との整合性を考慮
	本文	本文	コンクリート設計基準強度区分 ・ $21\text{N}/\text{mm}^2 \leq F_c \leq 27\text{N}/\text{mm}^2$ ・ $27\text{N}/\text{mm}^2 < F_c \leq 45\text{N}/\text{mm}^2$ ・ $45\text{N}/\text{mm}^2 < F_c \leq 60\text{N}/\text{mm}^2$	コンクリート設計基準強度区分 ・ $F_c = 21\text{N}/\text{mm}^2$ ・ $24\text{N}/\text{mm}^2 \leq F_c \leq 27\text{N}/\text{mm}^2$ ・ $30\text{N}/\text{mm}^2 \leq F_c \leq 36\text{N}/\text{mm}^2$ ・ $39\text{N}/\text{mm}^2 \leq F_c \leq 45\text{N}/\text{mm}^2$ ・ $48\text{N}/\text{mm}^2 \leq F_c \leq 60\text{N}/\text{mm}^2$	JASS5等との整合性を考慮
	本文	本文	-	投影定着長さLaが規定された図の追加	JASS5等との整合性を考慮
	仕様A	仕様A	L1 は重ね継手長さとする。ただし、径の異なる鉄筋の重ね継手長さは細い方の呼び名の値による。また図示のように末端のフックは、重ね長さに算入しない。D29以上の鉄筋は、壁・基礎スラブ・杭主筋を除き重ね継手を設けてはならない	L1 (L1h) は重ね継手長さを示す。ただし、径の異なる鉄筋の重ね継手長さは細い方の呼び名の値による。また図示のように末端のフックは、重ね長さに算入しない。D29以上の鉄筋は、壁・基礎スラブ・杭主筋を除き重ね継手を設けてはならない	JASS5等との整合性を考慮
	仕様B	仕様B	L2 は一般部分の定着長さを示す。（柱、梁主筋、小梁、スラブの端部上端筋、壁の縦・横筋および開口補強筋）	L2 (L2h) は一般部分（柱、大梁主筋、基礎梁、片持ち梁、小梁、スラブの端部上端筋、耐力壁・非耐力壁の縦・横筋および開口補強筋）の定着長さを示す	JASS5等との整合性を考慮
	-	仕様C	-	La は大梁主筋の柱内折り曲げ定着の投影定着長さを示す	JASS5等との整合性を考慮
	-	仕様D	-	Lb は小梁上端筋及びスラブの上端筋の投影定着長さを示す	JASS5等との整合性を考慮
	仕様C	仕様E	L3 は小梁下端筋の定着および非耐力壁の縦・横筋の定着、継手長さを示す。	L3 (L3h) は小梁下端筋の定着長さを示す。ただし、片持ち小梁・片持ちスラブの下端筋を直線定着する場合は、25d以上とする	JASS5等との整合性を考慮
	仕様D	仕様F	L4 はスラブ下端筋の定着長さを示す。ただし、梁曲げ強度算定時に下端筋を算入する場合には、柱フェイス位置より L2 とする（図面特記）。耐力版の下端筋は引張力を受けるので L2 とする。片持スラブの下端筋の定着は、小梁下端筋用の L3 とする	L4 はスラブ下端筋の定着長さを示す。ただし、梁曲げ強度算定時に下端筋を算入する場合は、柱フェイス位置より L2 (L2h) とする（図面特記）。なお、耐力版の下端筋は引張力を受けるので、折り曲げ定着する場合はL2h(L2かつLa) とする。片持スラブの下端筋の定着長さは、小梁下端筋用の L3 とする	JASS5等との整合性を考慮
	仕様E	仕様G	-	-	仕様記号の変更
-	仕様H	-	投影定着長さとは定着起点から折曲げ部の鉄筋外面までの投影長さを示す	JASS5等との整合性を考慮	
-	仕様I	-	定着起点とは鉄筋の定着のための必要な付着応力度が期待できる最初の位置を示す	JASS5等との整合性を考慮	
附記	附記	L1, L2 の長さは計算により定める場合は、本表の長さによらないことができる	鉄筋の定着長さを計算等により定める場合は、本標準図の長さによらないことができる	計算により算定する場合を考慮	
-	-	SR-001	-	全て新規作成（梁主筋の柱への定着長さの説明図）	JASS5等との整合性を考慮

平成24年構造改訂版 SR[ラーメン構造]編の概要

記載ページ等		記載概要		改訂理由等	
第2版	平成24年構造改訂版 SR編	第2版	平成24年構造改訂版 SR編		
SR-001	本文	本文	壁の横筋を柱コア内に定着させる場合	「壁の横筋を柱コア内に定着させる場合」を削除	内容見直し
	本文	仕様B	※印は目地底からの設計かぶり厚さを示す。性能表示適用により、外壁の設計かぶり厚さは目地底から35mm、一般部分のかぶり厚さは、最小かぶり厚(40mm)+10mmとする	目地底からの設計かぶり厚さを示す。性能表示適用により、外壁の設計かぶり厚さは目地底から35mm、一般部分のかぶり厚さは、最小かぶり厚(40mm)+10mmとする	内容見直し
	本文	仕様C	梁主筋を柱主筋の内側に配筋するため、梁側面のかぶり厚さは最小値よりも大きくなる	柱・梁の面を同一面とする場合は、梁主筋を柱主筋の内側に配筋するため、梁側面のかぶり厚さは最小値よりも大きくなる。梁幅を決定する際には割増し幅を考慮すること	内容見直し
	本文	仕様D	梁幅を決定する際には割増し幅を考慮すること	梁の鉄筋のかぶり厚さには、割増し幅を含む	本文から仕様への移動
SR-002	本文	本文	5)鉄筋の折り曲げ規準 (a)鉄筋末端の折曲げ形状 (b)鉄筋中間部での折曲げ形状	6)鉄筋の折り曲げ規準	JASS5等との整合性を考慮し、鉄筋末端と中間部を統一
	—	本文	—	旧SR-107より異形鉄筋間隔を移動	内容見直し
	—	本文	—	旧SR-105・107より柱・梁の出隅部を移動	内容見直し
SR-003	—	本文	—	スラブ筋(上端筋)の継手位置を追記	JASS5等との整合性を考慮
	—	本文	—	鉄筋の相互のずらし方にフック付きを追加。	JASS5等との整合性を考慮
SR-004	—	本文	—	「設計時の施工に配慮した配筋(例)」の項目名を追加	内容見直し
	—	本文	⇔上・下端筋を内側に配筋	↑上・下端筋を短辺方向の鉄筋の外側に配筋	内容見直し
	本文	仕様F	同一階のスラブにおいて、短辺方向と長辺方向が混在する場合は、建築物のけた行方向(長辺方向)又は張り間方向(短辺方向)のいずれかの方向のスラブ筋を外側に配筋するよう設計するとともに、図面に記載する	同一階のスラブにおいて、短辺方向と長辺方向が混在する場合は、建築物のけた行方向(長辺方向)又は張り間方向(短辺方向)のいずれかの方向のスラブ筋を外側に配筋するよう設計するとともに、図面に記載する	本文から仕様への移動
SR-006	—	本文	—	投影定着長さを追加	JASS5等との整合性を考慮
	本文	本文	下端筋の定着長さ ≥ 200	下端筋の定着長さ $\geq 10d$ 、 $\geq 8d$ に修正	JASS5等との整合性を考慮
	仕様E	仕様E	片持ちスラブの下端筋の定着はL3とする(通常のスラブと異なるので注意すること)	片持ちスラブの下端筋の定着は直線定着する場合は25d以上、折曲げ定着とする場合はL3かつ投影定着長さ10d以上とする(通常のスラブと異なるので注意すること)	JASS5等との整合性を考慮
	仕様I	仕様I	逆Tスラブの場合の下端主筋の定着長さは、折曲げ位置よりL3とする	折曲げ終点よりL3とする。ただし、下端主筋の投影定着長さは、梁断面の中心線を超え、かつ8d以上とする	JASS5等との整合性を考慮
	仕様K	—	片持ちスラブ筋の折曲げ位置は梁断面の中心線を超え、かつ200mm以上とする	仕様I・Kを統一して記載	内容見直し
	仕様L	仕様K	—	—	仕様記号の変更
	仕様M	仕様L	—	—	仕様記号の変更
	—	仕様M	—	片持ちスラブの上端筋を折り曲げ定着する場合は、L2以上かつLb以上とし、梁断面の中心線を超えること	JASS5等との整合性を考慮

平成24年構造改訂版 SR[ラーメン構造]編の概要

記載ページ等		記載概要		改訂理由等		
第2版	平成24年構造改訂版 SR編	第2版	平成24年構造改訂版 SR編			
SR-008	本文	本文	非耐力壁の定着長さは壁端からL3	非耐力壁の定着長さは折曲げ終点からL2	JASS5等との整合性を考慮	
	本文仕様D	—	(c) 梁中間にスラブが取付く場合と仕様D	(c) 梁中間にスラブが取付く場合及び仕様DをSR-010に移動	記載頁の変更による	
	仕様E	仕様D	—	—	仕様記号の変更	
	仕様F	仕様E	SR-010に示す出隅部・入隅部・形状変形部の補強筋と開口補強筋が同位置となる場合は, SR-008の補強筋を優先して配筋を行う	SR-011に示す出隅部・入隅部・形状変形部の補強筋と開口補強筋が同位置となる場合は, SR-009の補強筋を優先して配筋を行う	仕様記号及び記載頁の変更による	
	本文	仕様F	スラブに直接壁が取付く場合は壁筋を両側へ交互に定着する。(定着長 L3)	スラブに直接壁が取付く場合は壁筋を両側へ交互に定着する。(定着長 L2)	内容見直し	
	本文	仕様G	補強筋の径は切断するスラブ筋の最大径とする	補強筋の径は切断するスラブ筋の最大径とする	本文から仕様への移動	
	本文	仕様H	斜筋はスラブ上端筋と下端筋の内側に配筋する	斜筋はスラブ上端筋と下端筋の内側に配筋する	本文から仕様への移動	
SR-009	本文	本文	—	投影定着長さを追加	JASS5等との整合性を考慮	
	本文	本文	—	「 $t/2 < h \leq t$ の場合」のL2を折曲げ終点からに変更	JASS5等との整合性を考慮	
	—	本文仕様B	—	(b) 梁中間にスラブが取付く場合と仕様Bを旧SR-008から移動	記載頁の変更	
SR-010	本文	SR-011	本文	—	投影定着長さを追加	JASS5等との整合性を考慮
SR-011	本文	SR-012	本文	—	投影定着長さを追加	JASS5等との整合性を考慮
SR-012	本文	本文	壁端から定着	投影定着長さ及び折曲げ終点から定着に変更	JASS5等との整合性を考慮	
	本文	仕様H	—	上端筋または下端筋は, 階段受け壁厚さの1/2を超えて定着する	JASS5等との整合性を考慮	
	本文	仕様I	スラブ厚 $t1 \sim t3$ については設計図によるほか, 下記の数値以上とする. $t1 = 130 \text{ mm}$ $t2 = 90 \text{ mm}$ $t3 = 130 \text{ mm}$	スラブ厚及び壁厚 $t1 \sim t5$ については設計図によるほか, 下記の数値以上とする. $t1 \geq 130 \text{ mm}$, $t2 \geq 90 \text{ mm}$ $t3 \geq 130 \text{ mm}$, $t4 \geq 200 \text{ mm}$ $t5 \geq 200 \text{ mm}$	JASS5等との整合性を考慮	
SR-013	本文	本文	「階段の両側に小梁のある場合」の定着開始位置は梁端から定着長さ	「階段の両側に小梁のある場合」の定着開始位置は折曲げ終点から直線定着に変更	JASS5等との整合性を考慮	
	本文	本文	「折曲がりスラブで途中に梁のある場合」の下端筋が90°折れ曲がり定着	「折曲がりスラブで途中に梁のある場合」に投影定着長さを追記し, 下端筋を直線定着	JASS5等との整合性を考慮	
	—	仕様I	—	上端筋の定着はL2以上かつLb以上とし, 梁幅の中心を超えて定着する	JASS5等との整合性を考慮	
	本文	仕様J	板厚 t は設計図によるほか 130mm 以上とする.	板厚 t は設計図によるほか 130mm 以上とする.	本文から仕様への移動	
	本文	仕様K	板厚 $t1 \sim t3$ は設計図によるほか 130mm 以上とする.	板厚 $t1 \sim t3$ は設計図によるほか 130mm 以上とする.	本文から仕様への移動	

平成24年構造改訂版 SR[ラーメン構造]編の概要

記載ページ等		記載概要		改訂理由等		
第2版		平成24年構造改訂版 SR編		第2版	平成24年構造改訂版 SR編	
SR-014	本文	SR-015	本文	—	幅止め筋に135°フック付きを削除。	内容見直し
	附記		附記	—	本標準図においては壁の幅止め筋は、防錆処理(溶融亜鉛めっき等)を行なうこととし(図面特記に記載のこと)、かぶり厚さの対象とはしない。なお、幅止め筋を縦筋にかける場合は、そのピッチを通常の1/2とする。その場合には防錆処理は不要とする	内容見直し
SR-015	本文	SR-016	仕様E	屋外に面している場合でもタイル貼り、又はモルタル塗り仕上げなど耐久性上有効な仕上げのある場合は、50mmを40mmに読み替えてよい	屋外に面している場合でもタイル貼り、又はモルタル塗り仕上げなど耐久性上有効な仕上げのある場合は、50mmを40mmに読み替えてよい	本文から仕様への移動
	本文		仕様F	屋外に面している場合でもタイル貼り、又はモルタル塗り仕上げなど耐久性上有効な仕上げのある場合は、40mmを30mmに読み替えてよい。	屋外に面している場合でもタイル貼り、又はモルタル塗り仕上げなど耐久性上有効な仕上げのある場合は、40mmを30mmに読み替えてよい	本文から仕様への移動
	本文		仕様G	壁の幅止め筋は、防錆処理を行うことを原則とし、本図に示す設計かぶり厚さの測定対象とはしていない。ただし、幅止め筋からのかぶり厚さが上図に記載の必要最小限のかぶり厚さを満足する場合には防錆処理(溶融亜鉛めっき等)の必要はない	耐力壁の幅止め筋は、防錆処理を行うことを原則とし、本図に示す設計かぶり厚さの測定対象とはしていない。ただし、幅止め筋からのかぶり厚さがSR-002に記載の必要最小限のかぶり厚さを満足する場合には防錆処理(溶融亜鉛めっき等)の必要はない	本文から仕様への移動及び記載頁の変更による
SR-102	本文	SR-102	本文	杭からフーチング端までの距離200mm	設計図によるに変更	内容見直し
	仕様J		仕様J	杭1本打ちの場合のパイルキャップ隅角部のすみ切りは、杭面より200mmの位置で行なう。なお、杭が2本内以上となる場合のパイルキャップの水平断面形状は、長方形とする	杭1本打ちの場合のパイルキャップ隅角部のすみ切りは、設計図による。なお、杭が2本内以上となる場合のパイルキャップの水平断面形状は、長方形とする	内容見直し
	—		仕様N	—	鉄骨柱脚のアンカーボルト先据付け工法(SR-130参照)の場合はアンカーボルトと干渉する部分のはつりを行う	内容見直し
SR-103	本文	SR-103	本文	基礎梁下端からパイルキャップ下端までの距離100~150mm	設計図によるに変更	内容見直し
	仕様B		仕様B	根巻きコンクリートの厚さは100mm(鋼管コンクリート杭の場合は250mm)を標準とする。立上り主筋の必要はない	鋼管コンクリート杭の根巻きコンクリートの厚さは設計図による。本図において立上り主筋の必要はない	内容見直し
	仕様E		仕様E	基礎下端とパイルキャップ下端はパイルキャップ主筋と基礎梁下端の鉄筋が重なるのを避けるため、100~150mmのあきをとる。	基礎下端とパイルキャップ下端はパイルキャップ主筋と基礎梁下端の鉄筋が重なるのを避けるためのあきをとる。(設計図による)	内容見直し
SR-104	本文	SR-104	本文	柱主筋の定着長さL2	L2またはL2hに変更	JASS5等との整合性を考慮
	本文		本文	柱頭部の定着長さの記載なし	L2hを追加	JASS5等との整合性を考慮
	本文		本文	e/D部の梁上端からの距離L2	折曲げ終点からL1に変更	JASS5等との整合性を考慮
SR-106	本文	SR-106	本文	投影定着長さの規定なし	柱せいの3/4以上等を追加	JASS5等との整合性を考慮
	本文		本文	柱梁接合部の拡大図なし	柱梁接合部の拡大図を追加	内容見直し

平成24年構造改訂版 SR[ラーメン構造]編の概要

記載ページ等		記載概要		改訂理由等
第2版	平成24年構造改訂版 SR編	第2版	平成24年構造改訂版 SR編	
SR-107	本文	本文	投影定着長さの規定なし	La等を追加 JASS5等との整合性を考慮
	本文	本文	鉄筋間隔の記載	SR-003 に鉄筋間隔の記載を移動 記載頁の変更
	本文	本文	(e) 梁主筋の出隅部の記載	SR-003 に梁主筋の出隅部の記載を移動 記載頁の変更
	仕様H	—	2段筋の場合の受け筋は D10 @1,000 とする	削除 内容見直し
	仕様I	仕様H	—	— 仕様記号の変更
	—	仕様I	—	投影定着長さは「SR-001」参照を追加 JASS5等との整合性を考慮
SR-109	本文	本文	投影定着長さの規定なし	La等を追加 JASS5等との整合性を考慮
	—	仕様L	—	基礎梁主筋の定着長さは、La かつ L2 とする。ただし、投影定着長さは柱せいの3/4倍以上とする JASS5等との整合性を考慮
	—	仕様M	—	建築物の階数が、地上6階以上に適用する 内容見直し
SR-110	本文	本文	3) 小梁筋の定着	投影定着長さがLbを確保できる場合とできない場合を記載 JASS5等との整合性を考慮
	本文	仕様J	小梁のあばら筋については、SR-108 を参照とする	小梁のあばら筋については、SR-108 を参照する 本文から仕様への移動
SR-111	本文	本文	貫通孔の位置に基礎梁下端からの距離の記載なし	上端と同様に500を追加 内容見直し
SR-118	本文	本文	柱・梁への定着の折曲がり終端から鉄筋末端まで150	150mm以上かつ8d以上に修正 JASS5等との整合性を考慮
	仕様D	仕様D	妻耐力壁の壁面が柱と同一面である場合、壁の外側横筋は、柱内に L2 かつ柱断面の中心線を越えた位置で折り曲げて、柱コア内に 150mm 定着する。なお、縦筋の梁への定着は梁コア内に曲げ込んで L2 の定着長さを確保する	妻耐力壁の壁面が柱と同一面である場合、壁の外側横筋は、柱内に L2hかつ柱断面の中心線を越えた位置で折り曲げて、柱コア内に 8d 以上かつ 150mm以上で定着する。なお、縦筋の梁への定着は梁コア内に曲げ込んで L2 の定着長さを確保する JASS5等との整合性を考慮
	仕様F	仕様F	地下壁の外側縦筋は、梁内に L2 かつ梁断面の中心線を越えた位置で折り曲げて、梁コア内に 150mm 定着する	地下壁の外側縦筋は、梁内に L2h かつ梁断面の中心線を越えた位置で折り曲げて、梁コア内に 8d以上かつ 150mm以上で定着する JASS5等との整合性を考慮
—	—	仕様M	—	コア内とは柱・梁で帯筋・あばら筋の内側で囲まれた部分のコンクリートを示す 内容見直し